川と人

Vol.9
1996

JA2321

CONTENTS

石狩川名所めぐり

中富良野町　町営ラベンダー園・フラワーパーク ―― 3
秩父別町　子ども冒険の森公園・秩父別温泉ゆう&ゆ ―― 4

HISTORY　高間　和儀

河岸の街（江別）と外輪船 ―― 5～8

TRAVEL SKETCH　大久保　真弓

川と人 ― 外国の川を見て ―― 9・10

流域市町村の紹介

石狩市　はまなす薫る十万都市、石狩を目指して ―― 11
北広島市　「自然と創造の調和した豊かな都市」と「心のふれあう確かな小都市」を目指して ―― 12

インタビュー　川に生きる

千歳サケのふるさと館　木村　義一 ―― 13・14

河川事業の紹介

北海道開発局
第9次治水事業五箇年計画の運動展開が本格化 ―― 15
北海道開発局石狩川開発建設部
幾春別川上流護岸工事～水辺の楽校～ ―― 16
北海道開発局旭川開発建設部
緊急用河川敷道路事業　消火用水取水用護岸事業 ―― 17
北海道
地域に密着した川づくり～市町村施工事業の紹介～ ―― 18

トピックス

石狩市制施行記念事業
いしかり歴史野外劇「躍動～石狩は今」 ―― 19・20

石狩川振興財団の活動報告

北の川シンポジウム ―― 21
第三回ザ・セカンド・シルバニア・プログラム ―― 21
石狩川トーク&コンサート ―― 21
尻別川せせらぎまつり ―― 22
'96石狩川Eボート交流事業in滝川 ―― 22
編集後記 ―― 22

POINT 石狩川名所めぐり

今年オープンのフラワーパーク

中富良野町

北海道の真ん中…　雄峰十勝岳の山麓に広がる田園と花の街。
雄大な自然とラベンダーの香りが街全体をつつみこむ。

ラベンダーまつり「繁種祭」

ラベンダー狩り

JR中富良野駅から0・7km、徒歩で約10分のところにある北星山―ここが「町営ラベンダー園」です。約5万㎡の大花園は、冬には「北星スキー場」に変身します。山頂までは、リフトで登ることができ、ここから見下ろす一面のラベンダーには、思わず息をのむことでしょう。また、ラベンダー越しに見る中富良野市街地、それに連なるように広がる緑いっぱいの田園地帯と十勝岳連峰とのコントラストは、圧巻のひとことです。

「町営ラベンダー園」に隣接した"花のまち中富良野"にふさわしい「フラワーパーク」。花を中心にまちづくりを進める全国9都市で構成するフラワー都市交流の全国各市町の自慢の花も集められ、彩りを添えています。

また、JRで中富良野に着いた時に迎えてくれる「ドリームパーク」は、季節の花が線路沿い200mにわたって咲き誇る、細長い公園です。

花の季節ともなれば、さわやかな香りが風に乗って街全体を包み込みます。

PICK UP

なかふらの花園めぐり

町営ラベンダー園

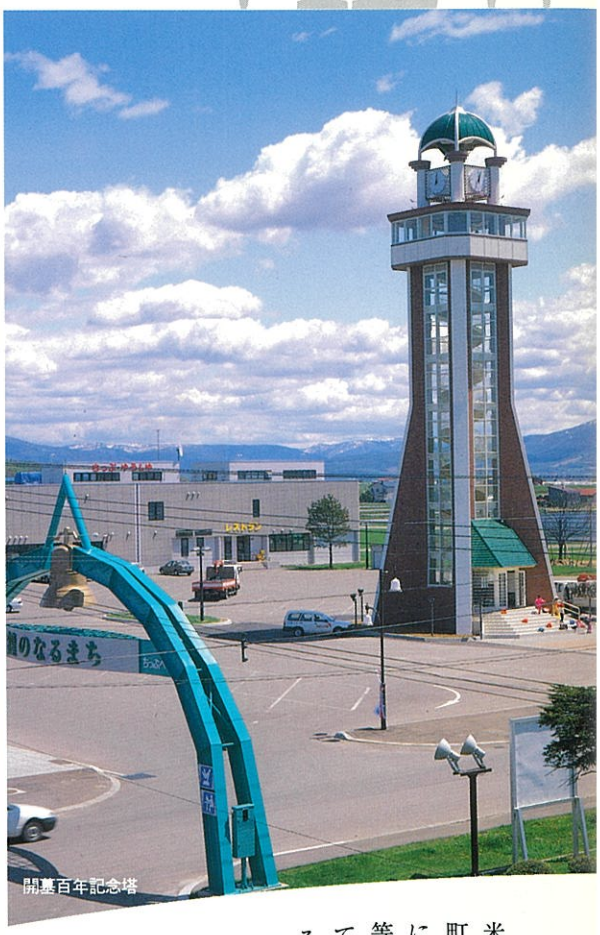
「ラベンダー観光」発祥の地、中富良野にはファーム富田、町営ラベンダー園、一輪の丘、彩香の里、ラベンダー羊ヶ丘の花園が点在し、フラワーパークとドリームパークを加えると7つの花の見どころがあります。それぞれの花園で微妙に違う美しさを楽しんで下さい。

VIEW

秩父別町

こがね色に輝く、チップの田園風景は人の心をなごませる。
「鐘のなるまち・ちっぷべつ」は、そんなやさしい町。

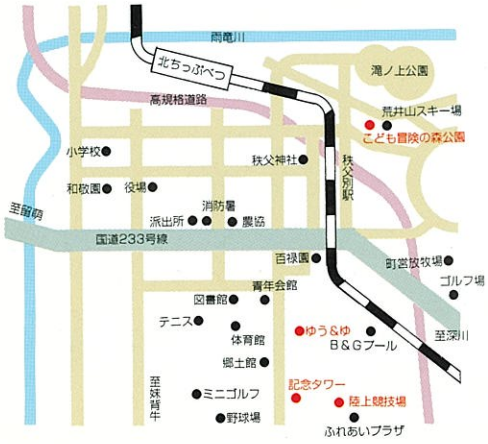
子ども冒険の森公園


開墾百年記念塔

陸上競技場

秩父別町は石狩平野の北端に位置し、米作を中心にする農業の町です。秩父別町の面積は47・26㎢と全道でも三番目に小さな町ながら、三年連続して全量一等米出荷を達成した良食味米の産地として名を馳せています。当町は、「鐘のなるまち ちっぷべつ」をキャッチフレーズにして、鐘の音＝ハーモニー（協調）の心を持ち、まちづくりを進めています。日本最大級の洋鐘を擁する記念塔を中心に、「秩父別温泉ゆう&ゆ」、体育館、プール、陸上競技場、キャンプ場、図書館などスポーツ及び文化施設を機能的に整備し、住民が集い、人が集い、活発な交流活動を行うことを目的にした施設整備を進めています。

当町の東部丘陵地帯にあるこども冒険の森公園は、親子連れ、ハイキング、遠足などで親しまれています。ここの展望塔から見る夕日は、暑寒岳の山並みを背景に田園地帯が浮かび上がる絶景を醸しだします。



PICK UP

秩父別温泉ゆう&ゆ

北空知で最大規模の温泉は、憩いと潤いのオアシス。
毎年6月にはゆう&ゆ公園でちっぷフェスティバルも行われ、たくさんの町民が集います。また陸上競技場やB&Gプール、郷土館など各種施設が温泉から歩いて3分以内！
スポーツ、観光、学習・・・お好きなメニューを選んで下さい。

秩父別温泉ゆう&ゆ

河岸（か し）の街（江別）と外輪船

石狩川の中流域下流部の、函館本線、国道12号線が併行するあたりは「越後村築堤＝江別」と呼称されている。この河畔から下流を望む風景は大河石狩そのものといえる。しかしこの川に行き通っていた、外輪船も雑穀を運ぶ長舟、重兵衛渡しの姿は今はない。築堤で遮蔽された河畔は、車や電車の喧騒もなく、時に「やつ目」舟か水鳥の水音のみである。

北海道史研究協議会常任幹事
（地方史研究）
高間　和儀

川の道

道内内陸部の交通は、幕末新千歳越えが造成されるまでは、その主体は水路であった。今から二百年前の寛政年間の記録の「シコツ越え」では、石狩を発し最初の泊所はイベチ（江別）またはトイシカリ（江別の対雁）であった。ここから分かれて北のテシオ、江別川を遡りイサリーシコツに泊し、南のユウフツに向かう。これ等の地点は幕藩時代「商い場」となった地点である。

明治となって、幌内炭田の開鉱が急務になると、幌内炭道が造成されるまで再び「蝦夷舟」による川道が利用された。これを支えたのは、明治9年対雁に樺太から入地したアイヌの人達でした。

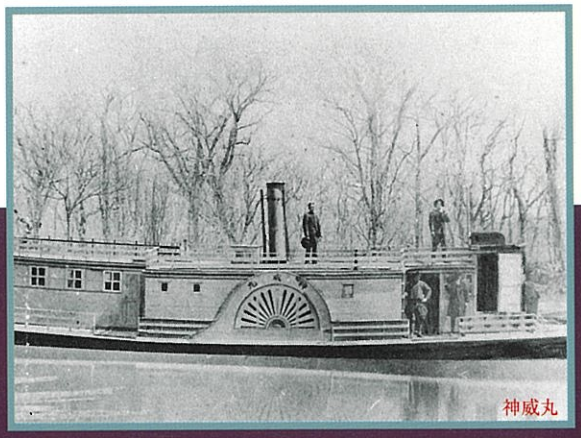
記録では

1　雁木（札幌）より対雁に至る
　水路凡そ5里（略）
1　バラトブトより同所（対雁）に至る
　水路凡そ9里（略）
1　石狩より同所（対雁）に至る
　水路凡そ10里　蝦夷舟　1艘に付
　上り　金1円20銭　下り　金80銭
　但し上り3人掛り　下り2人掛りに付き如此
1　対雁よりホロナイ石炭山に至る
　上り　金1円56銭
　下り　金1円4銭
　但し前同断之事

蝦夷図巻「石狩川を舟で下る図」（北大蔵）

HISTORY

石狩川の歴史


神威丸

「川蒸気」と「陸蒸気」の交わる地点

開拓使による札幌本府建設が始まると、増大する物資輸送に石狩川河口部に大型船が登場した。明治3年元組回漕会社が、開拓使より大型船3艘の貸与をうけ、海運に従事した。同5年からは石狩川運漕に汽船「石明丸」が導入された。同8年になると「弘明丸」が小樽・石狩・篠路間で運航、同12年には石狩常繋の「沖鷹丸」により小樽～対雁間に就航した。

この間、幌内炭の船便輸送積出地点に、ホロムイブト案から江別太案、さらに一転して鉄道を手宮まで延長の幌内鉄道敷設となり、明治15年全線開通石狩川との結接点江別駅」も設置され、まもなく出会う陸蒸気と川蒸気の舞台が整った。

「河岸(かし)」のまち

石狩川航路の中核となった江別港は、かって、エベツブトと言われた地で、米国式湿地営農を試みた江別太屯田が入地したのは明治11年である。しかし本格的兵村を形成したのは水陸交通が始まった同17年からで街づくりのための番外地設定は、3年後の明治20年であった。

河川の岸に形成された江別の街は、「河岸」本来の意味"川の港"として、単に船着き場でなく問屋や運輸機構を持ち、生産地と消費地とを結ぶ地点となるのは、さらに日時を要するが、明治10年利根川に初めて川蒸気が登場して間もなく、新開地北海道の石狩川に就航したことの意義は大きい。

開拓民が小樽から陸蒸気に乗り、江別で下車南空知を目指す入地者にとって、外輪船は江別の商人達からの声援を受け、「新天地への希望の船」でもあった。明治24年屯田兵が予備役となって、本部がなくなっても、街の盛況は衰えず河畔の駅や軌道は移され、駅前には広い貨物集積場も設けられた。

石狩定期航路の就航

この河岸の街造りのバックボーンとなった水運は、明治14年樺戸（月形）に集治監が設けられ、鉄道から遠距離地点への大量輸送は、水路によらなければならなかったことである。

当初和船模造の淀川船「樺戸丸」などを使用された。この運航は同監工事の請負楽三商会が、札幌県からの補助で従事した。同16年には「神威丸」「安心丸」が増強され、石狩～樺戸間を毎日就航した。

このような経緯で、江別は「川の道」と「鉄の道」がドッキングする地点となった。しかし、3県廃止、道庁時代への過渡期には引継や、植民地選定で民間団体の入地が一時停滞したためか、運航も途絶えがちになったと伝えている。

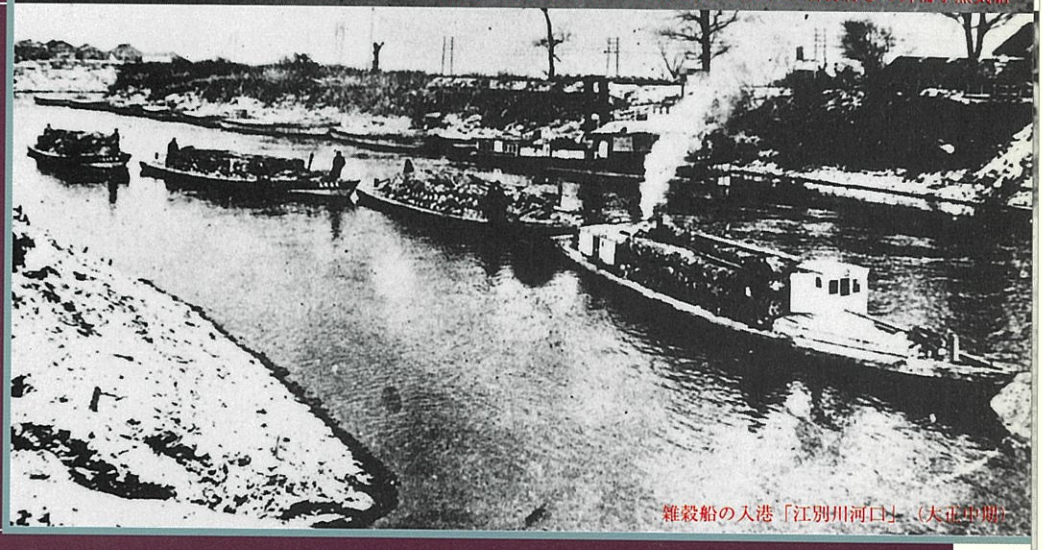
石狩航路2社競合

明治21年になり土田政次郎（大倉組支配人）などが再開をめざし、翌22年有限会社「石狩川汽船会社（資本5，000円、本社月形）」を設立、前掲の2船を引継ぎ航路を空知太まで延長運航再開した。

この年道庁でも沿岸植民を保護するため、鉄製外輪船を石川島造船に発注上川丸（61t）・空知丸（35t）・神威丸（16t）を建造、翌23年西田守信(前道庁通信課長)が、3汽船を1万円（50年　賦）、小汽船2隻は無償下付の特別払下げを受け、西田組汽船部（本社＝江別）設立、江別川の漁までの航路を加え石狩川航路に参入した。このため石狩川航路は2社競合となった。両社は沿岸各所に回漕店を置き、繁盛を極めたと伝えている。

江別港（明治40年頃）手前岸に「長艇」が陸揚げされている

江別川汽船発着場（明治30年代）川岸には石狩行きの外輪小蒸気船



雑穀船の入港「江別川河口」（大正中期）

が、しかし、その経営の実態は、前者は隔日運航したのに対し、後者はひと夏に僅か5運航のみであった。同25年になると鉄道は室蘭線と空知線が開通、増設線の利用は減じ、折角の「陸蒸気」に対する「川蒸気」時代を迎えながら、停滞の兆しさえみせた。このような事情のなか、翌25年石狩川汽船（大倉系）が西田汽船を吸収合併した。

航路の独占した合併後の大倉系の民営航路は、流域の開拓は植民地区画が完了前後であり、入地者輸送の需要も少なく農産物出荷は多くをのぞめなかった。さらに、2小企業の合併で人件費増で、これに対する収支がともなわなかったと報じられ、採算面から寄港地を縮小、さらに便数も減じたが、明治30年にはいると休航状態となった。鉄道が延長されたとはいえ、線路より遠い石狩川、江別・千歳川沿岸の開拓に着手したばかりの農村は、航路が唯一の輸送機関であり、途絶することは「陸の孤島」を意味し沿岸開拓者に大きな不安を与えた。

地元資本による試航

この不安解消のため、沿岸地域を商圏とした江別の有力者と、沿岸大農場主が中心となり同社を買収新会社を設立、苫前・上川・空知・神威の4隻で運航の継続をはかった。しかし再開したばかりの時点で、江別市街の9割を焼失する大火（30年8月）にみまわれ、ようやく復興のめどのついた翌31年には未曾有の大洪水で、江別はもとより航路のバック地帯は壊滅的災害を被った。

このような状態のなか、幾度か経営陣の交代で継続し、この間航路の道庁補助をうるための陳情活動を繰り返した。休航同然となった外輪船の活躍の場となったのは皮肉にも、大洪水救助の前進基地となった江別港からの被災者救助活動と救援物資輸送であった。

当時の江別港舟運の実態は、植民公報（35・3＝補助航路移管直前）によると同会社には、汽船3隻・和船十数隻、支社を月形に置き・・・航路は月形市街までは隔日定期運航、この間の運賃は、乗客一人上等60銭、普通40銭。貨物一載2銭2里以上33銭。穀類1俵13銭。樽物1個4斗物入27銭。下りは総て上りより凡そ2割方低廉。

この他和船数十隻ありて、常に石狩川・江別川・当別川等を往来し雑穀その他貨物に便す、とありまた、上流地方より角材、枕木等を漕送し陸揚げしこれを各地に搬出す。その額実に莫大なり。要するに江別（港）は、水陸交通の便においては、石狩大原野中第1に位置し・・・・と、伝えている。

HISTORY

石狩川の歴史

石狩川命令補助航路

明治34年となり、道庁は「石狩川航路の不成績に鑑み、国庫の補助をなすにあらざれば、その目的を達すること不可能なので、35年より補助航路にする」こととし、帝国議会の協賛をえた。補助条件で「使用すべき船舶は当該契約者専属の汽船に限る」とされ、上川・空知丸の2隻は債務のため、大倉喜八郎の所有に属していたので、同34年12月同人に直接命令された。その内容は

石狩河線　受命者　大倉組頭取大倉喜八郎明治35年4月ヨリ39年3月迄5ヶ年間

○江別石狩間ハ4月中2回　5月ヨリ11月迄ハ毎月4回ノ航行ヲナシ往復トモ茨戸・ビトイ・当別太ニ寄港

○江別月形間ハ4月中4回　5月ヨリ11月迄ハ毎月8回ノ航行ヲナシ往復トモ幌向・下達布・美唄達布・美唄　孤森ニ寄港

○月形札的内間ハ4月中2回　5月11月迄ハ毎月4回ノ航行ヲナシ往復トモ札比内・晩生内ニ寄港

その後の受命者は、37年に阿部久四郎に、大正代から昭和10年廃止まで藤原由蔵であった。

使用船は、当初上川・空知丸であるが、41年になると上川丸1隻となっている。その運航は、月形線に力点を置き、月13回で、寄港地も砂浜・枯木が増えている。

大正期の舟運

江別にとって、この時期は周辺村の開墾も進み舟運（長船）による穀類の集荷が盛んとなった。河岸の街江別も、幌内鉄道の当初架橋線の廃路を利用して、江別川と石狩川河畔入力軌道を敷設（明治37年）、これを契機に両側に雑穀倉庫群を形成し、明治末から大正期にかけて名実ともに「雑穀の街江別」となっていくのである。

○明治43年の来往旅客統計「地名（来・往）では、北村方面（465・115）、美唄方面（193・—）、月形（144・79）、当別（267・67）、石狩（217・22）

○雑貨統計（全同）

美唄・月形方面（6，500貫・16，500）、石狩方面（22・480）また、江別港の補助航路以外の水運（大正1年）

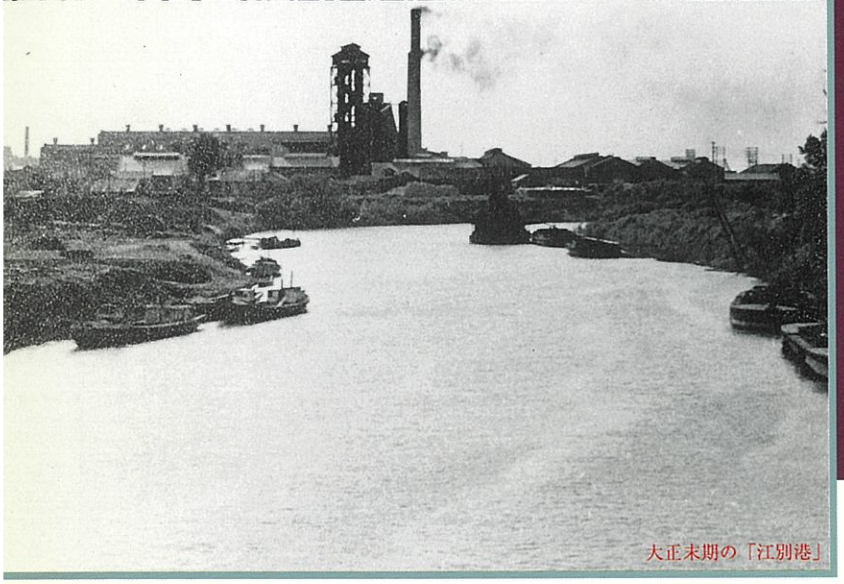
小回船（俗に長舟）40隻（業者　17　最大保有者　3隻）　積載能力（7t前後のもの）豆類120→130俵・燕麦170→180俵　木炭140俵（主として千歳方面から、引き舟の時380俵）

これらの小回船の稼働は、8～11月、新篠津村からの輸送は、同村産業組合所有船があり、倉庫も江別川河畔にあった。

このように隆盛を極めた「江別河岸」も、大正12年の千歳線（北海道鉄道）の開通や、道路網の整備で利用客も減少、昭和2年からは外輪船の休航状態が続いた。さらに治水新水路による水位低下や、昭和5年の夕張鉄道、同9年札沼線の開通でその役割を終えて、翌10年上川丸の廃船で終息した。

「河岸の街」としての機能は縮小したが、小回船による輸送は、2業者によって、昭和30年代までつづけられたが、雑穀の集荷は大型トラック輸送時代となり、さらに市街特殊堤の築造で河畔1列目の倉庫群とともに姿を消したのであった。

雑穀倉庫



大正末期の「江別港」

川と人——外国の川をみて

1年間のカナダ留学で得た貴重な体験の数々
川は家であり、道であり、文化をつたえる重要な場所だった。

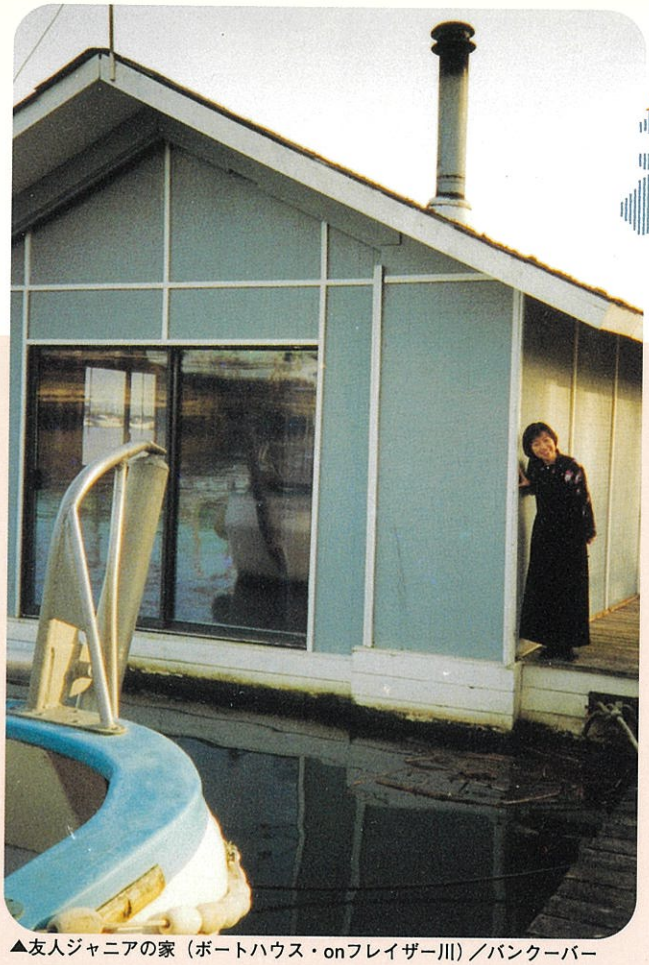
「去年の今頃はカナダにいたんだなぁ」相当のなつかしさをもって思い出すこの頃です。昨年1年間、私は学生としてカナダのバンクーバーにいました。

カナダを選んだ訳は3つ。治安が良いこと、北海道と気候が似ていること、そして自然に恵まれていること。たった1年ではありますが、私にとって大切な思い出がたくさんできました。

◎バンクーバー、友人ジャニアの川の上の暮らし。

カナダでもっとも親しくしていたジャニアは、数年前北大で日本語の勉強をしていました。

ある日、ジャニアから電話がきました。「引っ越ししたから、遊びにおいで」。さっそく次の週末、訪ねてみました。待ち合わせのターミナルでピックアップしてもらい、10分程車で走り、少々さびついた古い橋を渡りきるとすぐに左に折れ、彼女は車を止めました。左はフレーザー川、右は草地。「新居はどこ?」とたずねると、彼女はニヤッと笑って「川の上」と答えました。ジャニアのあとについて桟橋を下ると見えてきました。川の上の住宅10戸くらいが川沿いに一列に建って(浮いて?)います。バラックなんかじゃありません。ちゃんとした家です。なかは2LDK。キッチンもバスもあります。トイレは水洗でした。リビングで食事をしながら、「中にいるとここが川の上だなんてわからないね」と話していると、突然グラッときました。「地震?」思わず身体を硬くした私を見てジャニアはこういいました。「船が帰ってきたのよ。今日は大漁だったかしらね」。——なんて素敵な非日常的会話!でも、これがジャニアの日常なのです。夏は向こう岸の家々の明かりを見ながら川面をなでる風で涼み、ボーイフレンドとケンカしたときは、「川につきおとすわよ!」と叫び、冬はなかなか暖まらない部屋で暖炉のまわりに集まりワインを飲む。そして、朝と夕には震度2くらいの揺れに他の人々の生活を感じる…。そういえばジャニアの家には時計がありませんでした。川の上にのって、流されずに流れを感じる暮ら


▲友人ジャニアの家(ボートハウス・onフレイザー川)/バンクーバー

▲ジャニアの家(リビングで)/バンクーバー

PROFILE

名寄市生まれ。
藤女子短期大学英文科卒業後、
HBC北海道放送入社。
テレビ・ラジオ番組で活躍後フリーとなる。
1995年からカナダブリティッシュコロンビア大学付属ELIに留学。
カナダ研究とコミュニケーションについて学ぶ。

フリーアナウンサー
大久保 真弓

▲セーヌ川／パリ

▲国会議事堂とドナウ川／ブタペスト

し。「ゆとり」とは、お金があることでも物があることでもなく、また時間が山ほどあることでもないのだと初めて感じました。「ゆとり」とは「時の流れをいとおしむ気持ち」ではないかと思いあたったのです。川の上で私は少し哲学者になりました。

◎国境を越えて流れるドナウ川

夏休みに1ヶ月かけてヨーロッパを回ったときは、時の流れが育んだ文化の遺産に言葉もありませんでした。また、日本ではピンときませんが1本の川がいくつかの国にまたがって流れているという事実にも驚きました。

ハンガリーの首都ブタペストからオーストリアのウィーンまでは陸路3時間ですが私は6時間かけてドナウ川をさかのぼりました。「どこが"美しき青き"なのよ」と言いたくなる茶色っぽいドナウの色にがっかりしながらも、両岸の風景の変化は十分に楽しめるものでした。建築様式には全く詳しくありませんが、何かが違うのはよくわかります。家の大小、新旧。大きな集合住宅だけが続くところ、工場群の中から突き出る数本の煙突。そして森。「こういう変化は国境という線をもってガラリと変わるのだろうか」。1本の川の上をたどるだけで、いままで考えたこともないような疑問がどんどんわいてきました。

スロバキアに入ってブラチスラバという町で船は止まりました。夕方だったせいもあり、全体に薄暗く人影も少ない町でした。無制限の排気ガスと観光客にあふれかえるブタペストと静寂のブラチスラバ。このふたつの町をドナウはつないでいるのです。

カナダに帰ってから気がついたのですが、ホストマザーがいつも聴いていたクラシックのCDは、ブラチスラバに本拠地をおくスロバキアで最も古い、1929年創立のCSRオーケストラの演奏のものでした。スロバキアという国が歴史上どんな苦しみを経てきたのかは想像するしかありませんが、その国で約70年間活動を続けてきたオーケストラの音は、恐れと抑圧されたエネルギーを感じさせるものでした。薄暗い中でほんの数分見たあの町に、今度は降りたってみたいと思っています。

▲アウグスブルグの住宅地／ドイツ

◎好奇心をかきたてた、たくさんの川

たくさんの川を見てきました。ザルツブルグではザルツァッハ川にかかる橋の欄干の上で仮面をつけた男性がバイオリンを弾いていました。パリを流れるセーヌ川では陽のあたる所にだけ恋人達の姿が見えました。ドイツ・ロマンチック街道の終点、ノイシュバンシュタイン城を最も美しく見れるというマリエン橋の遥か下には小さいながらも勢いのある谷川が流れていました。カナダの首都オタワにあるリドー運河は冬凍結すると格好の近道となり、皆スケートで通勤します。

外国の川は、家であり、道であり、文化をつたえる重要な場所でした。また、人の目には見えない小さな生物達の唯一の棲み家として尊重されていました。洪水を防ぐことは大切、水がきれいなのも大切、緑がふんだんにあるのも大切。でも、まわりだけが「キレイ」に整えられても、そこに「人」が見えてこないと川に情緒は生まれてこない気がします。

川のこと、たとえば色や水量や生態系など、わかりたいと思う事がたくさん出てきました。昨年1年は私にとって休暇だったはずですが、実は「知らない事がまだたくさんある」――という事を深く学ぶ時間だったようです。

▲凍結したリドー運河／オタワ

▼ノイシュバンシュタイン城／ドイツ

はまなす薫る十万都市、石狩を目指して

石狩市

▲全道一の長さ（1412.7m）の石狩河口橋

変貌する大地

北海道の屋根大雪山系石狩岳に源を発する石狩川の河口に位置する石狩市は、日本海と石狩川に育まれた豊かな大地と三百有余年に及ぶ歴史の街であり、慶長年間に松前藩がアイヌ人との交易をするための「場所」として始まり、その後、道南地方や本州方面との交通、交易、の中心地となり、松前藩や幕府の直轄地になるなど西蝦夷奥地の政治経済の中心地として栄え、その名は「石狩鮭」に代表されるように「鮭のまち」で知られるようになりました。特に、明治期には、百四十万匹を超える鮭の水揚げを誇り活況を呈し、開拓使の鮭の缶詰工場も設置されました。また、明治末から大正にかけて酪農も盛んになり、昭和三十年代には、全国でも珍しい砂地を水田にする試みが成功し、道央の有力な米どころに生まれ変わり、全道有数の穀倉地帯となりました。その後、昭和四十年代には、都市開発が進み、隣接する札幌市の人口増等により大規模住宅団地の造成が相次ぎ、更に石狩湾新港とこれに伴う工業流通基地の造成で企業の進出も進み、人口は、現在五万四千人を超え増加の一途をたどっております。

石狩湾新港

企業の集積が急速に進む石狩湾新港地域は、石狩湾新港を中心に工業流通地域を持つ総面積三千ヘクタールの大規模プロジェクトで道央圏における物資流通の拠点港として着実な歩みを続けており、また、北方圏との交流の拠点として期待されております。

▲海・山・川、豊かな自然に恵まれた石狩平野

▼石狩温泉「番屋の湯」

▼市のシンボルはまなすと石狩灯台

十万都市・石狩へ

平成八年九月一日に道内三十四番目の市となり都市への仲間入りをしました。この市制施行を記念して「いしかり」発祥の地である石狩川河口の河川敷において、石狩川の流れを聴き、ステージ奥は生い茂る灌木の林という豊かな自然の中で市民約千五百名の参加による歴史野外劇「躍動――石狩は今」が演じられ、石狩の歴史・文化・風土と躍動感みなぎる石狩市の誕生と未来を表現しました。

石狩市は、まちづくりのキャッチフレーズを「はまなす薫る十万都市・石狩」と定め、新総合開発基本構想を策定し、二十一世紀に向けた長期展望と理想とする都市の実現に向け取り組んでおります。

「自然と創造の調和した豊かな都市」と「心のふれあう確かな小都市」を目指して

北広島市

平和と自然を守る

北広島市は、明治17年「広島開拓の祖」である和田郁次郎ら広島県人25戸一〇三人が一村形成を目指して輪厚川下流に集団移住し、広漠たる原始林で本格的に開拓に従事し、今日の基礎が築かれました。また「寒地稲作発祥の父」である中山久蔵が、明治6年に島松川上流で至難とされた水稲栽培に成功し、北海道稲作の発展に指導的な役割を果たしました。

以来、厳しい自然環境と闘いながら純農村として発展し、昭和43年には町制を施行しました。その後昭和45年から始まった北海道営北広島団地の造成を契機に急速な人口の増加を見るにいたり、今年9月1日に広島町から北広島市となり、21世紀に向けた新しいまちづくりをスタートしています。

▲寒地稲作発祥の碑

この市制施行を記念して、市内の石狩教育研修センター前に「平和の灯公園」を設置しました。これは、広島県広島市の平和記念公園の「平和の灯」を分火して、その灯を永久に保存し、平和と自然を守り抜こうとする北広島市の姿勢のシンボルとするものです。9月1日に広島県関係者と多くの市民が見守るなか点火式を行い、北広島から「永遠の平和」の輪が広がることを願いました。

▲市制施行記念事業「平和の灯点火式」

▲田園と緑に囲まれた市街地

緑・喜び・ふれあいの川

水害からまちを守ることに重点をおいていたこれまでの河川整備と比べると、近年は親水事業に対する市民の要望も多く、本市では第3次長期総合計画（H3～H12）の中で「河川敷地の緑化推進」を重点施策として位置づけ、北広島市発祥の地にほど近く、市民の「ふるさとの川」として親しまれている輪厚川の緑地整備に取り組んでいます。

この事業のコンセプトは、輪厚川を訪れた人々が自然にふれ、水辺の自然空間を楽しみ、憩い語らい、さらに北広島市の歴史の一端にふれることのできる河川緑地空間の整備であり、整備区間約1・3㎞を「自然を学ぶ水辺空間」「憩い語らう水辺空間」「街の動線となる水辺空間」の3つのゾーンに分けて平成6年度から事業に着手しています。

北海道が、せせらぎの音の演出、自然石を使ったロックリバーサイド、花壇、散策路等を整備し、本市は休憩施設、モニュメント芝生広場、水路、花壇、照明など周辺整備を担当しています。

また、ここには毎年市民がボランティアでコスモスの苗を植え、コスモスの咲く水辺とやすらぎの場を生み出し、コスモス祭りがにぎやかに行われています。

「市」にふさわしいまちづくりは、まだまだこれからです。今後も市民と対話しながら広域市町村圏での連携等も視野に入れ、本市が目指す「自然と創造の調和した豊かな都市」と「心のふれあう確かな小都市」づくりに努力していきたいと考えています。

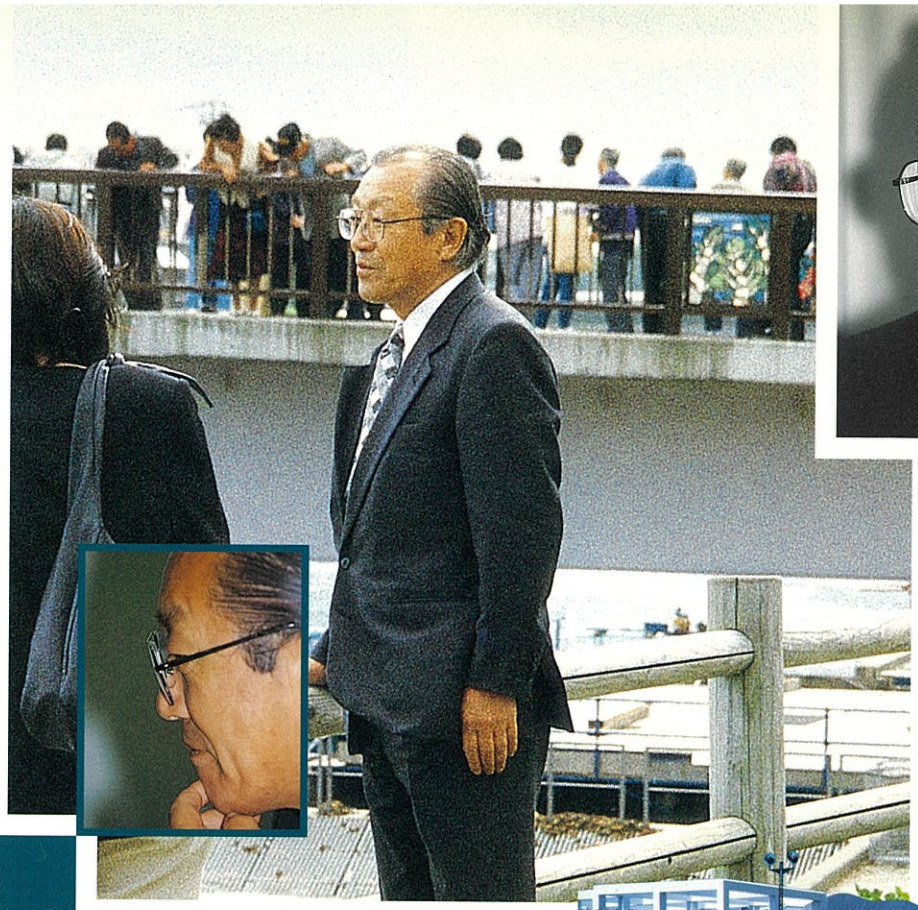
▼輪厚川緑地整備事業「コスモス祭り」

流路延長約２６８km、流域市町村４８。
大河石狩川の長い長い道程で関わり合う人々。
そういった人々の人生もまた石狩川を物語る。

INTERVIEW

川に生きる

第2回



千歳サケのふるさと館
館長理事　木村　義一さん

●昭和30年から35年間、北海道さけますふ化場にてふ化事業に従事。（千歳、根室、北見、札幌）その後は千歳サケのふるさと館の館長として施設の構想から携わり、現在に至る。

千歳サケのふるさと館
千歳市花園2丁目・インディアン水車公園内
TEL(0123)42-3001　FAX(0123)42-2310
●入館料（個人／団体：20人以上）
大人800円／640円　高校500円／400円　小中学生300円／200円　幼児／無料
●開館／1月21日～8月31日（9：30～17：30）
9月1日～11月30日（9：00～17：00）
●休館／12月1日～1月20日

秋、今年も千歳生まれのサケが故郷の川を力強く上ってくる。その姿を川の中から直接見られる観察室もあって、子供達で賑わう千歳サケのふるさと館。館長である木村さんはサケのふ化事業に長年携わった後、出発点である千歳に再び戻ってきた。サケとのふれあいを通じて子供達に自然を知ってもらうために。

100年の技術の歴史を一身に経験したふ化事業

「私が入った頃はサケの資源量が増えない時代でした。技術は明治21年からあるのですが、いくらやっても増えない時代が70年ほど続いていたんです。ではどうやって増やすかが最大の命題でした。そして終戦後、アメリカ軍からサケのふ化事業を勧告され、以前よりも盛んに研究が行われ、研究施設も整いました。その結果昭和47年から資源量は明確に増えました。5年ごとに倍々になりましてね。それまで200万匹だったのが現在では、4,000～5,000万匹、6,000万匹とも言われています。私は増えなかった時代からいまの増えた時代で辞めましたから、100年の技術の歴史を一身に経験したようなものです。いい時代にいました。

資源量が増えなかった当時の技術や施設は、今とほとんど同じなんですけど、ほんのちょっとしたことが違うんですね。ふ化したばかりの稚魚（仔魚）はおなかのようなところにさいのうという袋があるんです。そこには栄養が入っていて、2ヶ月くらいで吸収するんです。その2ヶ月間をいかに静かにさせるかが、その後の成長に影響を与える。"寝る子は育つ"ということなんですね。以前の技術ではその点をあまり気にしていなかった。砂利の中で寝ないで騒いでいたんです。また、サケは卵さえ取れればいいんだ、その後死ぬんだからという観点では結局いい稚魚は育たない。いい稚魚にするためにはいい卵にしなければいけない。ではいい卵にするにはというといい親を育てなければいけない。親の健康が大切だということなんですね。わかってみるとあたり前のことなんですけど、なかなか自然の摂理に近づくことは難しい」。

運命を決めたいくつかの出会いと偶然

「人の出会いというか、偶然というのは計り知れないなぁとつくづく思います。実は私の父がふ化場にいたんです。なんとなく父と同じ北大に進んだのですが、同じ道を歩まぬよう専門を海藻にしました。でも、卒業後の就職難でふ化場でアルバイトをしたんです。でもそれはアルバイトではなく、職員の前段で、それがわかったのはもう千歳に配属されていた時でした。1年間は正直なところどうやって辞めるかばかり考えましたよ。でも父の顔もありましたし　何より千歳のさけ・ますふ化場は発祥の地で、いわば出発の場である。その歴史を知るにつれ、この仕事をすることに意味があるような気がしたんです。当時は試験を色々とやっても数が増えない。やるか

らには増やしたいという思いというか使命感にかりたてられ、自分では一生懸命やりました。なにせ自分たちが考えないとこの魚は増えないとわかっていましたから。

稚魚はどうすれば砂利の中でおとなしく寝てくれるかという事はとても難しいテーマでした。稚魚は水の流れを必要とするんです。でも流れを感じると寝ないで泳ぎだす。流れを感じさせないで流れているという状態はどう作るか。しかもそれは一匹、二匹の問題ではなくて何百万匹をそういう状態にする。これらの問題を解決するために、セメントと砂利をたくさん買い込んで池を作りました。それでいざ試験の段階になるともうヘトヘト、それでしばらく休むことにしたんです。北見にいた時のことなんですが、北見工大で市民大学をやっていたんです。それで仲間と受けました。講義は流体力学だったんですけど、じつは今まで我々が非常に悩んでいた問題のヒントとなる学問だったんですね。"これだ"と思ってその先生の所に実はこういう試験をしているので、もっと詳しく教えてほしいと頼みました。すると今度は先生が驚いたんです。「私の妻のお父さんがふ化場にいたんです」と言って。そんな奇跡的な出会いがあって稚魚をおとなしく寝かせるマニュアルができたんです。もちろん増やした原因はそれだけではないですけど、技術的には大きな原因のひとつです。」

サケを通じて子供達に感動を与えたい。

「今の仕事は平成2年からです。当時は設計図しかできてない段階で、"魚だけを考えてくれればいい"といわれ、これは楽な仕事だと思って引き受けました。しかしいざ設計図を広げるとなんにもない。金魚鉢の大きいのが並んでいるようなもの。これじゃあサケは育たないと思って初めからやり直すことにしました。私はこの施設を通して子供達に感動を与えたいと思っています。このふるさと館でサケと接することで、川がサケを育て、そしてその川はどこから来るのかということ―森こそが魚を育てることを知ってもらいたい。これからの子供達は否応なく自然や環境問題を考えさせられることでしょう。そのプロローグとしてこの施設で自然を知ってもらうことが私の基本的なコンセプトです。だから水族館を小さくしたようなものだけは作りたくなかった。"魚だけを考える"ということは全てを考えることだったんです。ただ展示するだけではなく、水の管理など様々な要素が含まれる。でも私はラッキーな人間で、伏線があったんです。根室にいた時分、標津にサーモン科学館を作るので手伝ってほしいと同級生に頼まれまして、構想をずっと考えました。ですからノウハウはあったんです。もっと先を読める人間だったら、その時半分くらいのアイデアにしておけばよかったんですけど。1つのイメージしか浮かばないんです。だから結果的にここは標津と同じコンセプトになってしまった。向こうに悪いことをしたなあ～と思いますね。

お客さんの反応なんですが、ふるさと館の出口にノートを置いているんです。メッセージはほとんど子供達が書いてくれます。その多くが"おもしろかった"「また来る」というものです。それまで"珍しい魚をいれたらどうだ"と何度も言われましたが、私はあくまでもサケを中心にした北方圏の淡水魚にこだわりました。この施設を意味のあるものにしたかったので。だから今年になって入館者数が増えたのは、そういう姿勢が認められつつあるのかなと思っています。観るべきものがあると認められたのではないでしょうか」。

自然の川を理解しなければ、魚は育たない。

「魚にとっていい時代になったと思いますが、本当の意味で川というものを理解していただきたい。魚はいつも鳥などの外敵におびえながらエサを捕って生きています。エサを捕るのは大変な作業です。疲れたら休める場所や外敵から身を守るための隠れ家があったりしなければ魚はいつも全力で泳がなければなりません。ですから一様の深さと一様の流れの川は魚にとっていい環境とは言えないでしょう。サケもそういう川ではどんどん体力を消耗し、故郷の川に戻る前には力尽きてしまいます。魚には川の深みと浅瀬が必要なんです。それはつまり川の蛇行。蛇行が深みと浅瀬を作るんです。ですから遊水地などの事業を発展させてもらいたいと思うし、期待しています。個人的にはもう一歩進んで子供達が泳げる川であって欲しいと思っています。私にとって川は泳ぐところだと思うほど小さい頃から色々な川で泳ぎましたから」。

「私はラッキーだった」というように、その時代、時代で必要とされ、真摯に応えた。まるで天命のようにサケと出会い、戦いにも似た時を過ごし、今やっと純粋に感動できるようになったという。これからは、その感動や知識を、千歳さけのふるさと館を媒体に次の世代につたえていく――。

川と人との新たな時代は確かに始まっている。

河川事業の紹介

●北海道開発局●

第9次治水事業五箇年計画の運動展開が本格化

平成8年度は第8次治水事業五箇年計画の最終年度にあたり、第8次治水事業五箇年計画以降の河川整備の方向として、平成8年6月の河川審議会にて、「21世紀の社会を展望した今後の河川整備の基本的方向について」の答申が出されました。

答申では、

『洪水・渇水時のみならず、川の平常時も見据えた緊急かつ計画的・重点的な治水事業の推進が必要（川の365日の意識）』

との基本認識のもと、21世紀において、流域の視点に立って人と水との関わりの再構築を図り、

『健康で豊かな生活環境と美しい自然環境の調和した安全で個性を育む活力ある社会』

を実現するため、

『信頼感ある安全で安心できる国土の形成』――――（安全）

『自然と調和した健康な暮らしと健全な環境の創出』――――（環境）

『個性あふれる活力ある地域社会の形成』――――（活力）

を基本方針として第9次治水事業五箇年計画を策定することとされています。

建設省では、第9次治水事業五箇年計画の策定にあたり、総額25兆3，000億円の投資規模を要求しており、現在、建設本省及び地方ブロック（地方建設局・北海道開発局・沖縄総合事務局・各地方自治体）では、この投資規模の確保に向けて、全国的に各種PR・運動などを展開しているところです。今後、五箇年計画の投資規模が決定される年末まで各関係機関に働きかけていくことになります。

また五箇年計画の策定にあたっては、地域の意見、要望等といった「地域の声」を重視しできるだけ計画に反映させる方針ですので関係機関の皆様の一層のご理解とご協力を賜りますようお願いいたします。

第9次治水事業五箇年計画・地方ブロックでの運動等に関する問い合わせ先

北海道開発局建設部河川計画課（札幌市北区北8条西2丁目　☎011-709-2311）
課長補佐　柳屋　圭吾

北海道土木部河川課（札幌市中央区北3条西6丁目　☎011-231-4111）
課長補佐　佐藤　功

多自然型川づくりの推進（コンクリートの見えない川をつくる）　茂漁川の例

必要な治水対策とともに、多様で豊かな自然環境を保全・創出・再生する他自然型川づくりを推進する。

＜河川改修＞
川沿いに残る旧河道を使い余裕のある河道幅を確保。

＜施工後2年＞
川幅を広げることで多様な流れが生まれ、中州や水際にはクレソンなどの植生が回復し、市民の憩いの場に。

幾春別川上流護岸工事

～水辺の楽校～

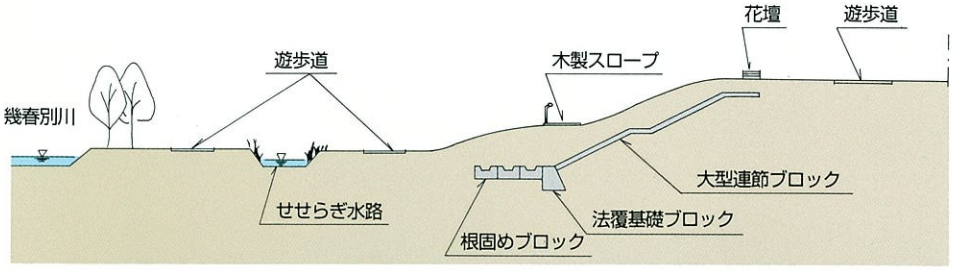
●北海道開発局　石狩川開発建設部●

石狩川の支川である一級河川幾春別川は、夕張山地の幾春別岳を源とし、三笠市・岩見沢市を縦貫し、北村で石狩川に合流する流路延長58・7㎞、直轄管理区間47・3㎞、の河川です。

上流には開発局で一番目に建設した桂沢ダム（多目的）があり、ダム湖の下流は渓谷ですが、奔別川合流点からは地形がやや平坦、幾春別の市街地が点在するさらに下流は、平地が広がり畑や水田、三笠市街地となっています。上流部から市来知頭首工（25・4㎞）までの河岸に柳類が繁茂する自然河岸が形成されています。途中の三笠市清松橋上流左岸（27・1㎞）の文教地区には河道の水裏部の中州を利用し、自然河岸を極力生かしながらせせらぎ水路、自然観察池等を整備して、子供達が安全に遊べ、さらに身体障害者や高齢者、大人まで広く利用できる水辺の楽校、幾春別川上流護岸工事を施工する事業です。

現在の子供達は、自然での遊び、特に水辺で遊ばなくなっています。今まで河川は危ない場所として近づけなかったのが大きな原因ですが子供達の健やかな成長のためには自然と接する機会を創ることが大切です。三笠市の三つの学校（新幌内小学校・美園小学校・中央中学校）が集中する当該地区に、この河道線形を利用して、幾春別川から導水した流速の少ない、水深も浅い水路を整備、管理します。これにより子供達が水辺に興味を持ち、水遊びという自然体験を通して、その地域社会の豊かさを体験学習出来るように、下記の整備を行っています。

覆土護岸の施工を行った後、低水路の水裏部の州を利用し、せせらぎ水路を設けます。

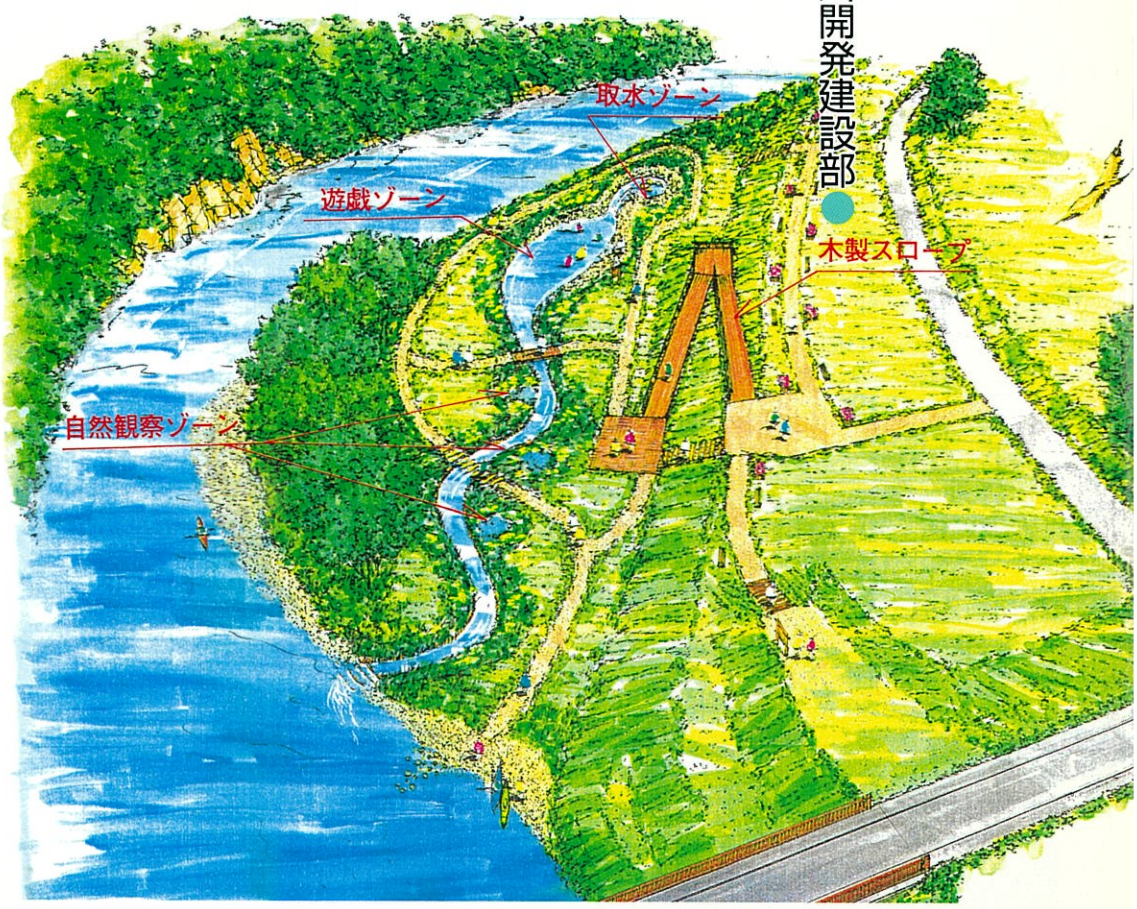


着工前

水路上流端は、自然河岸に近いフトンカゴと浄化に配慮した取水桝により遊戯ゾーン及び自然観察ゾーンに導水する取水ゾーンを設置します。遊戯ゾーンは水深30㎝程度の安全性のある親水河川空間を創出する事を目的としています。自然観察ゾーンには、植生、昆虫、魚を各々テーマとした三つの観察池を設置し体験学習の場として利用できる事を目的としています。

水路を安全に利用するために、下流端に落差工を設け水路床を緩勾配とし、流れを緩やかに保たせます。

高水敷の整備は自由広場と位置づけ、中低木や花壇などを配置し、低水路へアクセスするため注意事項看板、安全に遊べるための水位変動感知装置を設置して安全対策を講じます。また、高齢者や子供達が安全に往来出来る遊歩道・階段を設置するほか、身体障害者の方も利用出来るスロープを整備するなど、利用しやすい幅の広いアクセスをはかります。



緊急用河川敷道路事業
消火用水取水用護岸事業

●北海道開発局　旭川開発建設部●

北海道南西沖地震、阪神大震災などの災害が壊滅的な被害を及ぼした一因に、避難道路の不足、火災発生時の水不足、さらに緊急車両の移動のための道路が確保できなかったことなどがあげられています。

旭川市の石狩川河川敷では、「生活者重視の原点は、安全と安心」という基本認識のもと、広い河川空間を活用した緊急時の避難地や避難路として利用できる河川敷道路や、防災拠点、河川敷の緊急ヘリポートの整備、延焼を防止するための河川緑化を進めるほか、緊急時の消火・生活用水確保のために人が近づける護岸や取水施設の整備、地震などへの耐震性を強め、また災害発生時に住民の方々の避難が速やかにできるように、堤防の傾斜を緩やかにする緩傾斜堤防など、総合的な危機管理施策が進められています。

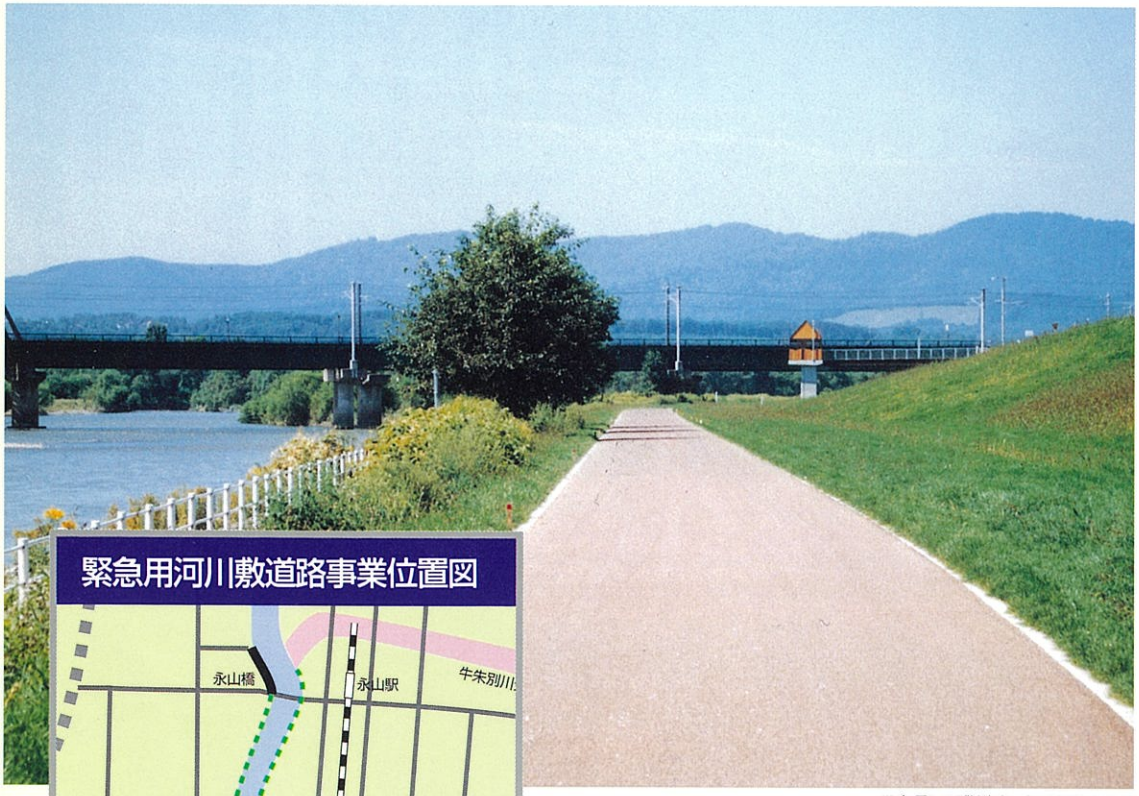
緊急用河川敷道路は河川景観を考慮し片側のみの舗装としていますが、道幅は緊急車両が行き来できるように2車線を確保します。

普段はサイクリングや散策路として多くの市民が利用します。

地震や火災の発生時に、欠かせないのが「水」。このため消火用水取水護岸は消防用自動車や生活用水の取水が容易にできるよう、水際まで緩やかな進入路を設けます。

普段は子供たちの水遊びやカヌーなどが楽しめる水辺空間として利用します。

普段は憩いの河川空間として利用され、災害時には、被害を最小に抑える3つの機能空間に変わります。



▲緊急用河川敷道路　旭西橋下流右岸

▲消火用水取水用護岸　金星橋下流左岸

地域に密着した川づくり

～市町村施工事業の紹介～

●北海道●

河川事業は国や道の仕事と思われている方が多いと思いますが、市町村長が国や道の管理する河川で事業を実施できる制度があるのでご紹介します。

1 都市小河川改修事業

市街化の著しい都市等における一級及び二級河川で以下の要件を満たした箇所で、改修工事を市長が実施できる制度です。

現在、道内では札幌市、旭川市、函館市、江別市で実施していますが、この外に平成8年9月に市となった石狩市、北広島市も実施できることになります。また、釧路市、苫小牧市、北見市等も条件を備えています。

要件

- ◆概ね30㎢以下の一・二級河川の指定区間内
- ◆道府県庁所在の市
- ◆人口20万人以上の市
- ◆人口10万人以上の市で市街化区域等の面積が市域の概ね2分の1以上の市
- ◆次のどれかに該当する人口5万人以上の市◎政令指定都市に隣接する市
  - ◎道府県庁所在の市に隣接する市
  - ◎地方拠点都市地域内の市

2 河川環境整備事業

治水上の整備が終了したり、改修の必要がない区間で、地域のまちづくりに密接に関連して特に河道整備を必要とする区域の水辺環境の形成や、汚濁の著しい河川等の浄化を行う事業を市長が実施できる制度です。都市小と同様一・二級河川の指定区間内で事業実施ができます。

道内では、千歳市のママチ川、帯広市の旧帯広川で事業を実施しています。

▲旧帯広川環境整備事業（帯広市施工）

▲山鼻川　河道～都市小河川改修事業
遊歩道、植樹～地方特定河川等環境整備事業
（札幌市施工）

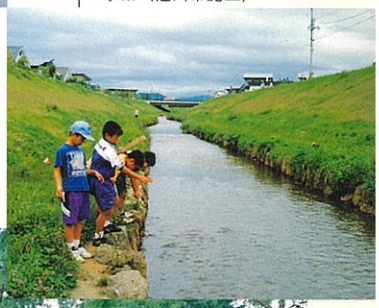
3 地方特定河川環境整備事業

河川管理者等が行う改修事業と併せて、市町村などが単独事業として緑地・公園・運動場等の整備や、付随的に必要となる河川工事を実施できる制度で、財源は自治省からの起債の充当となります。

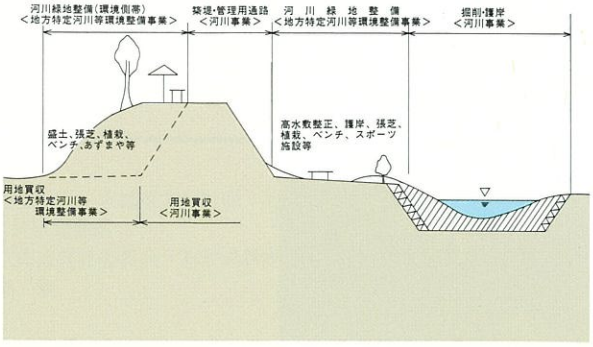
この制度は平成4年に創設され2年間の時限とされていましたが、平成6年に2年間延長され、さらに平成8年からは5年間の延長が認められました。

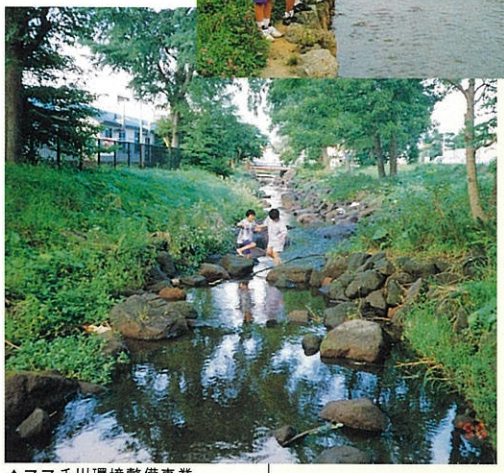
この事業は、国が管理する区間での実施も認められており、平成8年度では国の区間で30箇所、道の区間で25箇所で実施が予定されています。

▼ウッペツ川都市小河川改修事業（旭川市施工）



地方特定河川等環境整備事業イメージ図





▲ママチ川環境整備事業（千歳市施工）

以上概要を紹介しましたが、いずれも地域に密着した事業で、市町村が地域の声を反映した川づくりを行え得るものです。

詳細についてのご質問等ありましたら、道河川課計画係まで問い合わせ下さい。

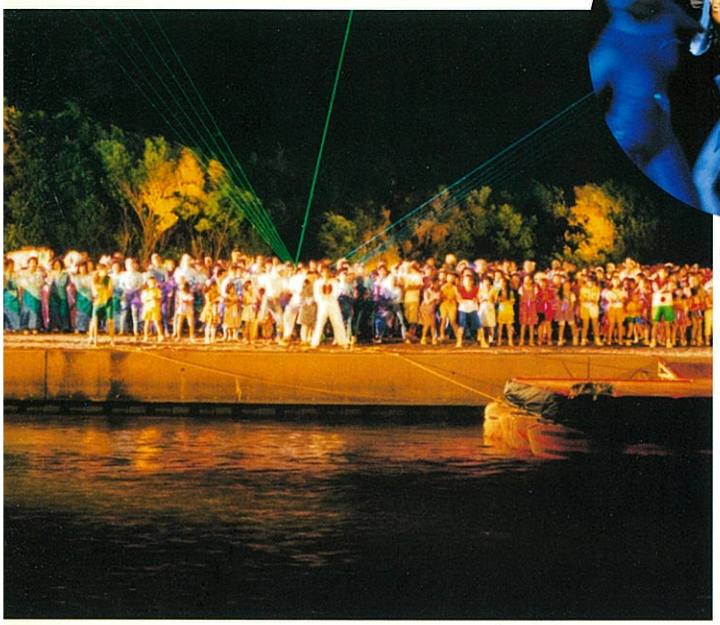
［Tel／011－231－4111　内線28－264］

KAWA TO HITO TOPICS

その時、石狩川は壮大なスクリーンになった。

石狩市制施行記念事業 いしかり歴史野外劇「躍動――石狩は今」

9月1日、石狩町は道内34番目の「石狩市」になりました。
それを記念して、去る8月3日（土）、
石狩川河口橋左岸河川敷の特設会場にて、
石狩の歴史・文化・風土を表した歴史野外劇が開催されました。
出演者・スタッフのほとんどが住民という歴史的な企画は、
石狩市誕生を鮮明に印象づけました。



▲出演者全員によるフィナーレ

▲水害は尊い命を奪った。

★★★ 石狩川に浮かび上がる壮大な歴史絵巻。

当日は8月といえども肌寒く、しかも午後7時30分の開演とあって、多くの観客が上着持参で会場に詰めかけました。

約6，000人の観客が見守る中、石狩市が歩んだ長い歳月を物語るにふさわしい豊かな自然を生かした壮大な水上舞台が、スポットライトに照らされて鮮やかに浮かび上がりました。と同時に、舞台を覆い尽くすように現れた真紅ののぼりを持った大勢の人々。背景の灌木の林の緑、人々の持ったのぼりの赤。そのコントラストの美しさは息をのむほど。冒頭シーンから会場を圧倒し、大きなどよめきが上がりました。かくして、石狩川の自然そのものが舞台の初めての試み、壮大な歴史絵巻は始まったのです。

★★★ 1，500人の住民が結集 開幕までのもう一つの物語。

開拓期の石狩川。探検家であり北海道の名付け親としても有名な松浦武四郎が予言に満ちた一節を読み上げる。

「札幌に府を置き給わば、石狩は日ならずにして大阪の繁盛を得ることであろう」。

この言葉を合図に数えきれないほどの人々が舞台に流れ込み、ところ狭しとエネルギーを爆発させます。

この野外劇には傑出した一人のヒーローが出て来るわけではありません。北の大地「石狩」の歴史を作り上げた一人々々が主役なのです。そして野外劇の舞台裏にも感動の物語がありました。

この企画は、市制施行というエポックに、住民の人々とその喜びをわかち合い、郷土「いしかり」への誇りとエネルギーを歴史とともに表現しようと考えたのが始まりでした。まちの歴史を刻んできた母なる川「石狩川」をイメージに公募した脚本をもとに、実際に石狩に住む人々がボランティアで集まりました。その数は出演者、スタッフなど総勢1，500人。"500人くらい集まればいい"という当初の予定をはるかに

▲練習風景

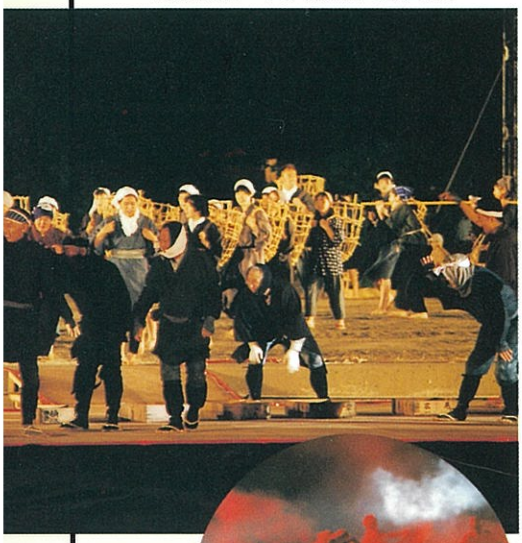
超え、噂が噂を呼び、日に日に数は膨れ上がっていきました。

とはいえ出演者もスタッフもほとんど素人。加えてこれだけの大所帯。出演者の練習調整が一番大変でした。限られた時間内で、練習日時や場所を調整し、それぞれシーンごとに細分しました。全員参加の通し稽古では雨にたたられ、屋内に変更というアクシデントもありました。また、屋外ということで、音響条件が通常と大きく異なってきます。浜風の風向きを考慮して、コンピューターを活用し、何度もシミュレーションを繰り返しました。おかげで、場面、場面が臨場感あふれるものとなりました。出演者の衣裳を作るのも大変な作業。それ以外にも小道具、大道具、照明、ポスター作りに至る、一つ一つの作業。大人はもちろんお年寄りから子供までがこの舞台化のために力を合わせる。

それこそが一番意味のあることなのです。さまざまな職種とさまざまな生活、人生を送る人々が、それぞれの思いを胸に結集しました。

この舞台には1，500人の数だけドラマがありました。

▲幻想的なシーンが効果的に使われた



▲当時のサケ漁

▲戦時中の様子

★★★そして、フィナーレ。未来への躍動！

舞台は、北の大地に夢を抱き移り住み、この大いなる自然と時に闘いながら生きた人々が壮大に描かれます。幾度も繰り返される石狩川の水害と、残された大きな悲しみ。愛する家族を失った人々の思いを込めたフルートの音と合唱が流れ、幻想的な舞が繰り広げられます。しかし石狩の自然は苦しみばかりでなく、喜びも与えてくれました。みずばしょう、ハマナス、そしてたくさんの森の生き物たちと草花・・・。子供達による石狩賛歌がステージいっぱいに響き渡りました。

そして時代は戦争、戦後へ。

開拓者の悲願であった砂地水田が造成され、石狩町は道央の穀倉地帯へと成長し、花川団地ができ、新しい仲間達が石狩に入って来ました。1972年には石狩河口橋が開通、石狩町は陸つづきになりました。

そして、新しい時代へ！ すべての出演者が埋め尽くす中、一人の高校生がメッセージを読み上げます。

「あの橋がかかる前にはこの川を渡る渡し舟があり、この水田が実るためには、砂との戦いがあり、水との闘いがあり、この川が鮭も遡らないほど汚れたことがあったということも、そして、それらすべての歴史が、だれか一人二人の英雄によってつくられたものでなく、名もない多くの人達の血と汗と涙によって築かれたことを、私たちは忘れません」

出演者全員によるフィナーレ。手拍子に合わせ足を踏み鳴らし、希望の声を響かせる。花火が打ち上げられ、トーンチャイムの「星に願いを」が会場に響きわたると、対岸の観客からも歓声が上がりました。石狩川に集まったすべての人々が躍動した瞬間でもありました。

思えばこの企画は進行しながら作られていきました。予想もしなかった1，500人もの参加、そして本番では奇跡ともいえる自然の演出が舞台を彩ってくれました。森の木々をゆっくりと流れるように揺らした風、クライマックス近くに降り出した小雨はレーザー光線に反射してキラキラと輝きました。たくさんの出会いや偶然、そして自然の力さえ味方にして、野外劇の幕は閉じたのでした。

「石狩でこんな素晴らしいことができた」

野外劇成功後の石狩の人達の素直な感想です。しかしそれは石狩の人達だけでなく、各方面にも多大な影響を与えました。これほどの規模のものを一つの街が全て自分たちの手で成し遂げてしまったのだから。これぞまちづくりの原点、これぞ地方文化の幕開けなのではないでしょうか。溢れんばかりの熱意を持って金字塔を打ち立てた石狩市の人々に、心から拍手を送ります。

野外劇の前と後では何かが違っていました。現在、石狩市に住む人々はみな誇りを持って暮らしています。

「躍動-石狩は今」

主催／石狩市歴史野外劇公演実行委員会・北海道文化財団・北海道新聞社・北海道文化放送・道新スポーツ・ＡＩＲ-'ＧＦＭ北海道
後援／北海道開発局・北海道・北海道教育委員会・石狩湾新港管理組合・北海道文化団体協議会
脚本／多田正太郎　補作／斉藤　歩
演出／斉藤　歩

〈ビデオ記録〉
この野外劇はＶＴＲに収められ、後日公民館や図書館などで貸し出しを予定しています。なお、練習風景から本番の模様を収めた120分のビデオを１本2,000円で頒布しています。

写真提供、取材協力／石狩市教育委員会社会教育部（石狩市歴史野外劇公演実行委員会）
☎(0133)-72-3137

'96.5.29

見つめよう、ふるさとの未来 北の川シンポジウム

21世紀に向けて新しい川のあり方を探る北の川シンポジウムが、5月29日、札幌で開かれました。

川はさまざまな生命のいとなみとの出会いを与え、時に大水害などの恐ろしさを秘めている人間にもっとも近い自然のひとつです。自然と人間の共生が問われる中で、川をより暮らしや地域に生かす取り組みがはじまっています。シンポジウムでは、女優であり建設省の河川審議会で政府答申案作成委員を務めた石井苗子さんの特別構演や、専門家などによるディスカッションが行われ、これからの河川改修事業では、「環境」と「防災」に重点が置かれているとの認識で見解が一致しました。また地域グループの活動や河川の自然を回復する多自然工法などの新しい取り組みなども紹介され、集まった約400人も交えて新しい川への取り組みについて真剣に話し合いました。

'96.6.10

原点にかえって 見つめ直そう生存環境 第3回ザ・セカンド・シルバニア・プログラム

21世紀の北海道をつくる知恵を学ぶ「ザ・セカンド・シルバニア・プログラム」＝第二の森計画＝の第3回講演会が6月10日、札幌市にて開かれました。自然との共生を中心テーマとしたザ・セカンド・シルバニア・プログラム、今回は阪神神戸大震災などの突発的な災害や都市廃棄物など現代都市文明が抱える問題を危機ととらえ、これらに対応しうる解決策を話し合いました。講演者からはこういった危機に対応しうる柔軟性や創造力を持つために、人材の育成やまちづくりの推進などの意見が相次ぎました。

'96.8.3・4

せせらぎのように 美しい調べと軽妙なトーク 石狩川トーク＆コンサート

「川の日」記念事業の一環として、8月3日に奈井江、4日に鷹栖町で「石狩川トーク＆コンサート」が開かれました。元HBCアナウンサーで現在フリーアナウンサーの大久保真弓さんの「川は文化」をテーマにした軽妙なトーク、そして世界的バイオリニスト長井明氏の美しいバイオリンの音色をゆっくりと流れるように楽しむという新しい試みです。

カナダ留学経験を持つ大久保さんは、石狩川やカナダ、ヨーロッパの川について、ご自身の体験談を交えながら語り、旭川生まれで札幌交響楽団コンサートマスターの長井さんはベートーベンのバイオリンソナタ第5章「春」などを演奏、最後はマイクとバイオリンを手に大久保さんと長井さんの楽しいトークも行われました。

石狩川振興財団の
活動報告

'96.8.3

川に親しみ川を大切にする「川の日」制定記念 尻別川せせらぎまつり

7月7日の「川の日」制定記念として「尻別川せせらぎまつり」が8月3日、蘭越町尻別川河畔公園（ランラン公園）で開かれました。「川の日」とは建設省が全国規模で制定した記念日です。これからの河川のあり方として、より自然に親しみ、川を大切にしてゆく活動を支援してゆくため、七夕伝説の「天の川」のイメージにちなみ 7月7日を選定しました。"遊ぼう、学ぼう"をテーマに約1,500人が訪れた尻別川で、魚のつかみ取りやカヌー試乗、パークゴルフなどを楽しみました。ステージでは「人と川の新しい関係」をテーマにした構演や小学生6人が川に関する体験を述べるなど、子供も大人も川にふれあいながら川について考えた一日でした。

'96.8.3・4

河川環境の改善を流域の連携で…'96石狩川Eボート交流事業in滝川

上・中・下流の交流による文化創造が行われる地域社会の実現を目指した全国ネットのEボート交流事業はExchange（交流）の他にEcology（生態）Environment（環境）Eternity（永遠）のニュアンスが込められています。95年は千歳川、そして本年は石狩川の中間地点にある滝川市に舞台を移し、8月3日、4日の両日、たくさんの流域住民が参加して開かれました。3日はフォトコンテストと抽選付の石狩川本流川下り。江部乙から滝川市民ゴルフ場までを、68艘のボートやカヌーが自然を楽しみながら川下りに挑戦しました。川下りの後は滝川市役所大会議室にて講演会「今後の河川環境のあり方」と「流域連携と住民及び官の役割」をテーマとしたシンポジウムが行われ、これからの河川や流域連携についての意見が出ました。

4日はハイライトのEボートタイムトライアルがラウネ川で行われました。札幌や滝川市内から12チーム152名が参加。大半が初心者とあってまっすぐ進まずに苦戦していましたが、自然と一体となったカヌーやボートの素晴らしさを満喫していました。

その後の流域懇親会と閉会式では滝川でのEボート交流事業の成功を参加者、スタッフとともに称え合いました。

◎ 編集後記 ◎

●北海道の短い夏、河川敷ではいろいろなイベントが繰り広げられる。中でもカヌー、ボート、いかだによる川下りが年々盛んになっている。
今後は、川岸からだけでなく、水上から見た川づくり、さらには水中から見た川づくりの検討も必要。石狩川航路の復活や魚がのぼりやすい川にするためにも。

●今年から7月7日を「川の日」に制定。「石狩川の日」は8月7日と平成5年11月の石狩川サミットで決定されている。いずれも七夕の日であり、彦星と織姫星が天の川を渡って年に1度の逢瀬の日である。最近では星を眺める機会が少なくなり、都会では天の川もよく見えなくなってしまった。天の川はアイヌ語で「ペッ・ノカ（地上の川が天に映ったものの意）」というそうだが、いつ天に映っても恥ずかしくない川にしたいものだ。

●9月1日に石狩市と北広島市が誕生。両市とも水害と闘い、母なる川の恵みを受けて発展してきた歴史がある。石狩市の市制施行記念として石狩川河川敷で演じられた歴史野外劇は圧巻。これからも川とともに歴史は続く、水害との闘いも。

●今年は第9次治水事業五カ年計画策定の年。まずは、安全で安心できる国土基盤をつくり、そして自然と調和した環境と個性豊かでうるおいのあるマチづくりのために必要な投資規模の確保を。年末まで、関係機関、関係団体の努力が期待される。

オオハクチョウ

ガンカモ科

全身純白色、長い首と黄色い嘴を持つ大型の水鳥。その優美な姿はおとぎ話の主人公や王室のシンボルなど、昔から美の象徴とされてきた。翼60㎝、嘴10.5㎝、尾19㎝内外。幼鳥が灰色なのはあまりにも有名。シベリア、ソ連極東で繁殖、日本には冬鳥として渡来し、湖沼や河川に生息する。コーコーあるいはコホンコオーとよく響く声で鳴く。

企画　北海道開発局・石狩川開発建設部
発行　(財)石狩川振興財団　〒060 札幌市中央区南1条東1丁目5番地 Tel(011)242-2242
平成8年10月

※表紙PHOTO：鴨々川